

5・陸前高田市立博物館平成24年度の取り組み —被災資料の再生を目指して—

熊谷 賢 陸前高田市立博物館 主任学芸員

0. はじめに

陸前高田市立博物館では、昨年度の文化財レスキューによって救出された被災文化財等の安定化処理を現在も継続している。この間、自然史標本については全国の博物館、研究機関のご尽力によって安定化処理が全国規模で展開されている。また、被災資料の仮収蔵施設となった旧陸前高田市立生出小学校（以下、「旧生出小」）では東北地方太平洋沖地震被災文化財等救援委員会、岩手県教育委員会、岩手県立博物館等のご指導を得ながら、方法論の未確立の部分が多い、多種多様な被災資料の安定化処理を暗中模索の状態ではあるが、自分たちの手で着実に継続しているところである。また、旧生出小では処理できない特殊資料については、岩手県立博物館を中心に安定化処理が継続されている。未だ22万点を超す膨大な被災資料の安定化処理は先の見えない超長期的な作業ではあるが、「陸前高田の資料は陸前高田が再生させる」という信念のもと、救出された資料を1点でも多く残すためスタッフが一丸となり、自分たちのできることを一步一步進めている。本報告では、平成24年度に陸前高田市立博物館が行ってきた被災資料を残すための取り組みと、博物館活動について報告する。

1. 博物館体制の再構築

平成24年4月1日より、被災資料の仮収蔵施設であった旧生出小を「仮設陸前高田市立博物館」として位置づけ、本多文人元館長を館長として正式に迎え陸前高田市立博物館の再スタートを切った。職員体制は、館長1名、主任学芸員1名、非常勤の学芸員2名、資料管理員5名（常勤は主任学芸員のみ）である。うち、非常勤職員4名は昨年度文化財レスキューに従事した臨時職員である。この9名に5月から緊急雇用対策による臨時職員3名、10月から被災ミュージアム再興事業による臨時職員4名が加わり、総勢16名のスタッフとなった。しかしながら、臨時職員の雇用は、復興関連事業の増加に伴い困難を極め、

予定していた人数の確保はできなかった。

また、海と貝のミュージアムは正式に廃止が決まり、それに伴い、海と貝のミュージアム所蔵の貝類標本及びツチクジラ剥製は陸前高田市立博物館に移管する手続きを取り、陸前高田市立博物館資料として管理することとなった。

2. 自らの手で再生させる

「可能な限り自らの手で資料の安定化処理を行う」という現地の方針を受け入れてくださった救援委員会、岩手県立博物館等のご指導を得ながら、現地ですることができるまでやるという考えで作業は継続している。

基本的な処理方法としては昨年度確立された除泥→除菌→脱塩→乾燥→経過観察という工程を踏襲する形で行った。砂を払った状態で燻蒸した資料は、一冬越して、春を迎えてからカビの再発生が確認された。やはり、丁寧に除泥、除菌、脱塩を行わないと再劣化につながるのである。このことを踏まえ、平成24年度は、民具資料、紙資料、貝類標本の資料群を重点的に安定化処理することとした。

民具は丁寧に泥を洗い落とし、除菌→水道水による脱塩→精製水による脱塩→乾燥→経過観察という手順で行った。金属のみの資料であれば大きさにもよるが概ね1週



こびりついた泥の除去

間で脱塩が完了するが、木製品などは資料によっては1ヶ月経過しても塩分が感知されるものもあり、処理には膨大な時間がかかっている。また、資料によっては除菌の段階で薬品の漂白作用による古色、使用痕等を残すことができないものもあるので、この点については、今後別の処理方法の確立が必要である。

紙資料、特に古い教科書類の安定化処理では、試行錯誤を繰り返し以下の方法にたどり着いた。これは岩手県立博物館赤沼英男先生からのアドバイスで、旧生出小では、除泥、除菌、脱塩、凍結保存までを行い、それを定期的に岩手県立博物館に運び込み、真空凍結乾燥を行うというものである。これによって、旧生出小では脱塩までを行い、乾燥は岩手県立博物館という流れが構築された。しかしながら、洗浄によるインクの流れ出しの危険性の高い資料については処理方法の確立が急務である。



教科書類の洗浄

旧生出小でできることをやるというスタンスで進めている安定化処理ではあるが、その作業は一連の作業工程が確立できたとしても、別の資料を処理しようとする、問題が発生し新たな方法を考えなければならない状況に陥る。この試行錯誤の繰り返しである。なお、自然史標本についても各機関等のご支援をいただきながら進められたが、紙面の都合上、岩手県立博物館の各担当者のご報告をご覧いただきたい。

3. 自らの手でできることをやるための整備

旧生出小での安定化処理の効率化を目的として平成24年度は被災ミュージアム再興事業の採択を受け、以下の整備を行った。

- ・ 体育館内および図書室に仮設収蔵庫の設置
(処理後保管)
- ・ 教室への暗幕、エアコン、除湿機の設置
(保管環境整備)
- ・ 資料乾燥用エアコン付プレハブ4棟の校庭への設置
- ・ プレハブ型大型冷凍庫の設置(冷凍保管)
- ・ 脱塩用水槽とリフトの設置(大型民具安定化処理用)
- ・ 大型超音波洗浄機の設置(安定化処理用)

また、安定化処理、保管環境整備等被災資料の長期に渡る安定的保管については、東京国立博物館、岩手県立博物館のご指導を得ながら今後も進めていく予定である。

安定化処理の終了した資料で、現地での修復が困難な資料については抜本修復を各機関に委託した。

4. 現地スタッフのスキルアップのために

関係機関のご指導を得ながら継続している安定化処理は試行錯誤の連続である。このような中で、現地スタッフのスキルアップになればというお考えのもと、7月30日から8月6日にかけて文化財保存支援機構、東京国立博物館による「文化財の危機管理セミナー『陸前高田学校』」を旧生出小学校で開催していただいた。紙、カビ、染織など我々が常日頃から抱えている課題をテーマとした講師陣のご講義は、抱えていた問題を少しずつ解決して行くための糸口を見出してくださった。



文化財の危機管理セミナー『陸前高田学校』

また、ワークショップ形式で行われた被災資料の安定化処理は現地スタッフが講師となり進められたが、これによって、自分たちの普段行っている作業をまとめ、参加者に伝えることで、自らの作業の再整理を行うことができた。

参加者には被災資料の現状、抱える課題などが伝わったと思うが、何よりも現地スタッフの真剣な姿勢は確実にスキルアップにつながっていると感じた。このセミナーを主導していただいたのは救援委員会岩手県担当の神庭信幸先生である。

8月6日から10日にかけては昭和女子大学武田昭子先生による被災民俗文化財再生のための保存修復活動が旧生出小で行われた。これは、高田人形（被災により溶けてしまった土人形）や紙製おもちゃなどの処理の困難な資料の方法確立及び修復を目的とするもので、武田先生の指導の下、歴史文化学科の学生9名によって行われた。また、一部の資料について大学において修復を行っていただいている。このような処理の困難な資料の安定化処理は現地で行えるものできないものがあるが、方法論が確立されることで現地での処理を可能にする部分も多く、今後の多種多様な資料の安定化処理を進めなければならない現地としては、最も望んでいたご支援の一つであった。

5. 博物館は生きている

博物館としての機能は未だ回復してはいないが、何とか「陸前高田市立博物館は生きている」ということを広く市民に訴えたい。今、博物館はどうなっているのか、陸前高田の宝はどうなったのか。本多館長と我々の思いは国立科学博物館のご協力によって震災復興・科博コラボミュージアムという形で実現された。8月11日から19日の期間で市内のコミュニティーセンターを会場に恐竜アロサウルスの全身骨格と文化財レスキューの現状を紹介する展示である。アロサウルスは子供たちに夢を与え、文化財レス

キューの現状は市民に希望を与えるものとなり、9日間で1,511名の入場者数を数えた。被災地ということで会場の確保など開催までに多くの紆余曲折があったが、主導していただいた真鍋真先生の陸前高田市立博物館のためにという強い思いによって実現できた展示であった。

6. おわりに

この2年間は、岩手県教委、岩手県博等、自衛隊のご協力を得ながら現地主導で、完了することができた一次レスキューに始まり、被災文化財等救援委員会、岩手県博のご指導を得ながら今なお継続している安定化処理に追われる日々でした。この間、救援委員会の神庭信幸先生、赤沼英男先生をはじめとする岩手県博のみなさんには混乱した状況の中から安定化処理、資料整理など方向性を示していただきました。そして、何よりもこの長期戦を戦い続けることができている背景には、「被災した資料は可能な限り自らの手で再生させる」という我々の考えを最優先していただけたことがありました。これからも、自分たちの手で安定化処理及びその整理を継続していきたいと考えておりますので、末永いご支援をよろしくお願い致します。



震災復興・科博コラボミュージアム in 陸前高田